



戸山流居合道全国大会 3 連覇
小野寺 藍子
Onodera Aiko

戸山流居合道 範士八段昇格
日野 康壽
Hino Kojyu



日本管楽合奏コンテスト全国大会 高等学校 S 部門 優秀賞・特別賞(ヤマハ賞)
最後列左が千葉涼真部長

登米総合産業高 吹奏楽部

戸山流居合道宮城県連盟登米支部支部長の日野康壽さんは2019年5月27日、高い技術と支部長として後進の育成に努めていることが評価され、範士八段に昇格した。

日野さんは、退職後の2000年に居合の道に足を踏み入れた。「インターネット」で戸山流居合道を知り、心を静めて一刀に込める所作に引かれた」と石巻市の渡波支部に入門した。05年に日野さんが登米支部を設立。古い教えを学ぶことで心を照らし、磨くという意味の「古教照心」を修道訓に活動を始め、鍛錬を積み重ねて八段昇格を果たした。

「居合道は体だけでなく、集中力も鍛えられる。私たちは、人とのつながりを大切に、楽しく親しみやすい雰囲気活動しており、子どもからお年寄りまで気軽に参加できる。多くの人に居合道の魅力を知ってもらうためにこれからも活動していきたい」と意欲を語る。

戸山流居合道
大正から昭和初期にかけて陸軍戸山学校で制定された軍刀操法を、誰もが学べるように居合道として確立したのが所属する登米支部には現在11人が所属し、随時会員を募集中。
☎050(3775)7724(日野)

「目標は優勝だったが、全国のレベルが高いので、自信はなかった。優勝できて素直にうれしい」と、えくぼを浮かべながら大会を振り返った。

居合道との出会いは、小学1年の終わりころ。日本の文化を学んでほしいと、母に誘われたことがきっかけ。初めは手に切り傷を作ることもあるが、日に日にできる形が増え、上達している実感を得られることが楽しくてたまらなかった。居合道では、ただ刀を振るだけでなく、相手を想像し、その相手の目を見る「目付け」が重要視される。練習でも本番を想定し、基本動作や目付けを反復。練習を通して身に付けた集中力が3連覇の原動力になった。

「今後の目標は4連覇と居合道の会員を増やすこと。これからも形の向上に取り組みしていきたい」と、4連覇を視界に捉え、精神を研ぎ澄まして刀を振る。

第25回日本管楽合奏コンテスト全国大会は2019年11月17日、東京都文京区の尚美パリオホールで開かれ、15人以下で編成するS部門において登米総合産業高の吹奏楽部が特別賞であるヤマハ賞を受賞した。

7月に開催された全日本吹奏楽コンクール登米本吉地区大会では金賞を受賞するも、目標としていた東北大会出場はかなわなかった。部長の千葉涼真さんは「目標を達成できなくて残念だったが、それまで一番いい演奏ができ、金賞を受賞したのは自信になった。このメンバーなら、練習を積めばもっといい演奏ができると思った」と、目標を日本管楽合奏コンテストに切り替え、再び歩みだした。

同コンテストは演奏曲を自由に選べる。話し合ってから決めた曲は松下倫士作曲の「繚乱」。母と子の苦しい運命と、その二人が互いを思う気持ち、そして離れ離れになった後に再会するという物語を表現した曲だ。曲が決まり、全国への挑戦が幕を開けた。ストーリー性のある曲を演奏する上で、何より求められるのは高い表現力。話し合いながら何度も曲を聴き、個人、パ

ト、全体練習を繰り返して曲の理解を深めていった。着実に実力を付けて迎えた予選、4度目の挑戦で念願の予選突破。同校初の全国大会への切符をつかみ取った。

全国大会当日、緊張の色が見える部員たちだったが「自分を信じてとにかく楽しんで」と、努力して練習してきた時間を自信に変えて演奏。豊かな表現力で奏でられたハーモニーが会場を魅了した。全参加者の演奏が終わり、固唾をのんで成績発表を待つ。張り詰めた空気の中、登米総合産業高の名前が呼ばれると、静寂を破り部員たちの歓喜の声があふれにこぼれた。

顧問を務める小松裕樹教諭は「一人一人が自分やほかの部員と正面から向き合い、最後まで諦めずに努力し続けたことが結果につながった」と目を細める。千葉部長は「みんなの気持ちがばらばらになっただけの時期もあったが、この仲間たちだからこそ乗り越えることができた。最後に最高の演奏ができてうれしい。来年度こそは、吹奏楽部の最大の目標である全日本吹奏楽コンクール東北大会出場を果たしてほしい」と、後輩たちに向けてほほ笑んだ。